



2016年
第4回日中環境問題サロンの紹介

櫻井次郎 (神戸市外国語大学・准教授)

① 李力氏の報告

最初の報告者の李力氏は、北京市朝阳区環友科学技術研究センターで活動しています。もともと環境教育や啓発活動をしていましたが、徐々に中国の廃棄物リサイクルの推進や、気候変動関係の教材作成、市民、政府、メディアが参加する円卓会議の促進支援など活動の幅を広げています。2000年からは、日中韓環境情報共有サイト「ENVIROASIA」における中国の責任者として、日中韓三か国の環境NGOの交流と情報共有を進めています。これらの活動を続けることにより、中国の環境NGOのなかでは広く名が知られられる存在になっています。

2014年には中国のポータルサイト「SOHU」が各分野の先駆者を表彰するイベントにおいて「公益先鋒人物賞」を受賞し、翌年には中国環境保護部の主催により、中国の環境保護活動に貢献した人物を選ぶイベントで、「2014-2015年グリーン中国年度人物」として表彰されました。

今回の李力氏の報告で特に興味深かったのは、2016年から開始されたばかりの「楚源モデル」プロジェクトです。このプロジェクトは、近年の中国環境行政の取組み強化と関係しています。以下、簡単に同プロジェクトについて紹介します。

李力氏は、2016年7月に湖北楚源集団株式会社の副社長に就任しましたが、同会社は同月19日、度重なる基準違反の排出行為により、地元荆州市の環境保護局から2769万円の過料、及び操業停止命令を受けたばかりでした。ちなみに、同会社は染料生産メーカーであり、主要製品・H酸の年産4万トンは世界でもトップシェアを誇り、同会社の操業停止処分の情報は、翌日の

複数の証券ニュースで確認できます。また、行政過料の金額も、環境汚染分野では湖北省の過去最高額とされています。

李力氏は、同会社の会長から直接要請を受け、同会社の汚染処理施設の改善プロセスを第三者の立場から監督、指導するため、特別に設置された副社長として就任することになりましたが、給料は1元(年間)にするよう自ら希望しました。このようにほぼ無給で副社長の任務を引き受けたのは、同公司内部の全ての会議に参加する権限を持ちつつ、同会社の利益からは独立した視点からその環境改善事業を評価するため、だったそうです。

なお、同会社には筆者(櫻井)も今年3月に訪れ、環境改善事業を直接見学してきましたので、この件については機会を改めて報告したいと思います。

企業の汚染改善プロセスをまとめた図 (2016年12月21日発表資料より)



李力氏の受賞の様子 (2016年12月21日発表資料より)



第四回日中環境問題サロンの様子 (2016年12月21日撮影)

はじめに

今号では、2016年12月21日に開かれた2016年第4回日中環境問題サロン「中国の公害・環境問題と環境NGOの取り組み」の内容を紹介いたします。今回のサロンは、一般社団法人ナレッジキャピタルの協力により、グランフロント大阪のナレッジキャピタル・アクティブスタジオが会場となりました。



活動報告をする李力氏 (2016年12月21日撮影)

② 趙亮氏の報告

二人目の報告者の趙亮氏は、2010年に「天津緑領」(http://www.fgyic.org)という環境NGOを立ち上げて活動していました。あおぞら財団と私も、創設されて間もない同団体を訪問しましたが、趙亮氏はその後、北京の自然大学で研修を受けたのち、自ら大気汚染の改善を目的としたプロジェクト「好空気保衛侠」(良い空気を守る勇者、というような意味)を立ち上げ、活発な活動を続けています。今回は主に、このプロジェクトについて紹介します。

③ 徐華氏の報告

三人目の報告者は、「昆山市鹿城環保ボランティアサービスタ」で事務所長を務められている徐華氏です。昆山市は、上海市が江蘇省蘇州市と接する郊外の街で、経済技術開発地区があるため、日本からも多くの企業が進出しており、「電化製品の都市(電子城)」とも呼ばれています。この地域で2013年から、廃油のリサイクルやごみ分別の推進、啓蒙活動などを行っています。



活動報告をする徐華氏 (2016年12月21日撮影)

微博に掲載された「好空気保衛侠」の活動 (2016年12月21日発表資料より)



活動報告をする趙亮氏 (2016年12月21日撮影)



同プロジェクトは、中国版ブログ(微博)や中国版ライン(WeChat)などのSNSを駆使して大気汚染の発生源を直接監視すると同時に、地方政府の環境保護部門にも積極的に働きかけ、厳格な環境行政を促すという活動です。同プロジェクトにはすでに全国規模で多くの協力者が情報を提供しているため、現場の最新の状況が画像や映像などで微博やWeChatから確認することができます。また、これらの情報を地図でまとめて提供することも始まっています。

廃油リサイクルでは、レストランなどから地域の住民と協力して廃油を回収し、回収した廃油から石鹸をつくっています。このような活動を通して、地域住民の環境意識の高まりを感じているそうです。中国料理は油をたくさん使ったため排出される廃油も多く、このような活動の意義も大きいと思います。

④宋克明氏の報告

四人目の報告者は、河南省と山東省にまたがって広がる湿原で、渡り鳥とその生息地を保護する活動を20年以上も続けている「長垣県緑色未来環境保護協会」の会長の宋克明氏です。宋氏が特に注目している雁は、東欧諸国ではすでに絶滅していて、東アジアでも今では800羽に満たないそうで、しかも個体数は年々減少しています。

宋氏が活動する黄河沿いの湿地帯では、渡り鳥保護協定の保護対象鳥類が109種、国家重点保護鳥類が36種も確認されています。東アジアの雁の約2分の1(300羽あまり)がここで冬を越しているそうです。

この渡り鳥の越冬地では、季節になると渡り鳥の違法な密猟が増えるため、宋氏の主な活動はこれらの違法な狩猟を地元の警察と協力して防止することです。密猟は夜に多いため、宋氏の活動も夜の見回りが多いそうですが、驚くことに、このように密猟された鳥を料理して出す露店も少なくないそうです。今後の課題として、最近ではごみの増加などの環境悪化も渡り鳥の生息地に影響を与えているため、環境保護ボランティアを組織して湿地保護の意識を高めることが指摘されていました。

今年も中国で実際に活動している4つの環境NGOの方から直接お話を聞くことができました。日本のメディアからは、中国の深刻な環境汚染の状況ばかりが伝わってきますが、このように問題解決のために努力している人々との交流を通じて、実際の状況を知ることができたのは大きな成果だと思います。



活動報告をする宋克明氏
(2016年12月21日撮影)



講演を真剣に聞く参加者のようす
(2016年12月21日撮影)



徐華氏が廃油をリサイクルして作った石鹸
(2016年12月21日発表資料より)



コラム：女子大生は見た！その2 内陸なのに「海」が見える街 — 武漢

當間美波（神戸市外国語大学中国学科4年）
(2015年9月～2016年7月中国湖北省武漢大学に留学)

武漢にて「海」を見る

昨年のブログ記事に引き続き「女子大生が見た！」第二弾！今回は、昨年中国の武漢に留学していた際、最も衝撃的だった出来事についてご紹介いたします。それは忘れもしない昨年7月6日、私は今まで見たこともない光景を目の当たりにしました。地下鉄の駅に大量に流れ込む泥水、河川の増水により長江から打ち上げられた魚たち、膝上まで水に浸かりながら歩く人々。昨年の夏、中国各地は記録的な暴雨に襲われ、洪水被害によりいくつもの街が沈みました。私の留学先である武漢大学がある湖北省武漢市も被害が大きい地域の一つでした。

しかし、武漢が水害に見舞われたのは昨年に限ったことではありません。武漢では「春来看櫻花、夏来看海（春は桜を見に行き、夏は海を見に来る）」という冗談がよく言われるほど、毎年のように洪水が起きています。毎年6、7月は2週間以上雨が降り続き、水はけが悪いせいか街のあちこちが「海」のようになり、被害が深刻な地域では床上浸水も珍しくありません。友人によると、武漢大学周辺の商店も毎年のように浸水し、その度に新しい店を入れ替えるそうです。昨年の大洪水の被害は最大規模で、約500棟の家屋の損傷、22.65億元（370億円）の経済損失、14名の死者を生みました。



武漢大学周辺のようす
(2016年7月撮影)



街中を歩く人々
(2016年7月撮影)

「海」の原因と対策

そもそもなぜ毎年洪水が繰り返されるのでしょうか？それは武漢の地形と都市開発が関係しています。長江が通る武漢は、古くから水の都とも呼ばれ、湖も多く非常に恵まれた地域でした。しかし、1950～1980年代中国各地では食糧不足が深刻化したため、湖の一部や池を埋め立て田畑にしました。

そして、90年代に入ると埋立地にはマンションやビルが建てられ、居住区や観光地として開発されました。その結果、都市の排水機能が低下し、毎年のように「海」が見られるようになったのです。

この問題を解決すべく、2013年地方政府は130億元（約2150億円）を排水処理システムの改善に充てました。それでも依然として現状が変わらないことに市民は不満を募らせました。そして、特に被害が拡大した昨年、武漢出身の大学生が武漢市水道局に対して130億元の使い道を公開するよう申し立てるといふ出来事がネットでも話題になりました。

おわりに

さて、今年はどうかと、まだ深刻な洪水被害は出ておらず、「海」の目撃情報はまだないそうです。果たして排水処理システムの改善が進んだからでしょうか？

武漢は日本人にとってはあまり馴染みのない都市ですが、中国内陸部でも最も開発が進む中核都市であり、街中高層ビルや商業施設、工場の建設ラッシュです。表面的には「発展している」という印象を受けますが、一方で、都市開発の基盤とも言えるインフラ整備は不完全で、一度大雨が続けば人々は洪水に苦しみ、巨額の経済被害を生みます。表面的な経済発展を脱し、武漢の街から「海」が無くなるのはいつの日でしょうか？



第四回日中環境問題サロンの様子 (2016年12月21日)